福岡教育大学紀要，第62号，第５分冊，137―150（2013）

教職を志す生涯スポーツ受講生の授業観に関する研究
―教育学的含みを持たせた力の育成について考える―

A study on the class observation of student who wants to be a teacher
― Thoughts on training of the students' academic strength ―

池　田　光　功*　　松　﨑　守　利**

Teruyoshi IKEDA　　Moritoshi MATSUZAKI

* 福岡教育大学保健体育講座非常勤　** 九州女子短期大学子ども健康学科

相　原　　豊***　　平　田　哲　史****

Yutaka AIHARA　　Tetsushi HIRATA

*** 九州女子大学人間発達学科　**** 福岡教育大学保健体育講座

（平成24年10月１日受理）

Abstract

The purpose of this study is to subject class observation of student who wants to be a teacher and also to be discussed the students' power of execution and educational material. At the class, disaster and emergency prevention were implemented for the relation to understand team play and team sports by teaching academic strength. The measurement of the study was to send out the multiple choice and written questionnaire. It was asked to answer what you have learnt in the class and what you may be used in the future. The answers were to learn team work, communication skill, enjoyment of exercise, building friendship, being healthy, focusing on fitness, sharing pleasure and happiness, challenging and working and helping together. Regards to usefulness, the top answers were communication skill, being healthy, focusing on fitness, enjoyment of exercise, building human relations, self reliance, observation skill, tolerance, ability to get things done and leadership. To pursuit and teach the class which gives pleasure and inspiration, is to provide the students to learn the enjoyment of exercise and build the friendship. I acknowledged that power of observation and tolerance is necessary to maximize the power in team exercise and also found oneself comparing others are different. The reason is that providing and supporting appropriate class measurement, students gain skill up by thinking themselves and taking an action. My future subject will be continued to study how the student who wants to be a teacher can enjoy learning.

Keywords: Teaching, Lifelong sports, Class observation, Education.
キーワード：教職，生涯スポーツ，授業観，教育学.

1. はじめに

本研究は，教職を志す「生涯スポーツ」の受講生を対象とした授業観に関する研究であり，将来，子どもの教育に携わっていく学生の実践力や資質などに関することについて，学生あるいは生涯スポーツ担当教員から見た授業観について教育学的に考察していくことを目的としたものである。

授業では防災や防犯に関連づける内容なども一つのきっかけとして，総合的なる「力の育成」とは如何なるものであるかを教育学的に考え，それらのことを学生と教員が共有することを中心に考察したものである。とりわけ，教職を志す学生においては，それらのことに関して意識的に取り組んでいかねばならない課題であることが考えられ，学校で仕事をするということは，子どもたちに教育を実践することと同時に，子どもたちの生命を守る責務がある。将来における教職という立場において，子どもたちの生命及び自らの命を守っていくことに関して，これをどのように生涯スポーツの授業で教育していくべきことであるかを考え，教育学としてのあり方やその内容を含ませながら教育の道筋を考えていくものであった。

その内容に関しては，例えば「落ちついて素早く行動することができる」，「大きな声が出せる」，「走る」などを意識的に考えて，授業の一場面で取り入れていく必要があるものと考える。しかしながら，それら全てができるようになることを授業で求める姿勢ではなく，また走力や筋力，泳力などをスポーツ選手のようになるものでもなく，それらを補う力や方法を身に付けさせたいと考えたものである。それは一つに「チーム力」や「協力」であり，これらは総合的に命を守るための力を高める教育に他ならないと考えている。チーム力とはどのようなことを示すのか，あるいは協力とは何か，これらのことは，生涯スポーツの授業であるからこそ，それを指導し考えさせることができるものと考える。また，それらの知識や技能を必要とする場面が多いと考えられる本授業による視点を通して，今回の調査から得られた回答や意見を総合的に考察することで，教職を志す学生の指導に役立てること，そして，将来，学生が教

表 1. 質問紙調査の項目と内容について.　(2012 池田，松﨑，相原，他)

質問Ⅰ-①：教職を志す上において「生涯スポーツ」の授業から，どのようなことを学ぶことができましたか．
以下の語群a.～t.より4つまで選んで（4つ以下でも可）その記号を解答欄に記入してください．
その他の場合はt.の記号を選択解答して語群のカッコ内（　）に適する語句を直接記述してください．

【語　群】

a. コミュニケーション力　b. 競技の技術力　c. 仲間づくり　d. 努力すること　e. 自信を得ること　f. 規律

g. 態度　h. 意欲　i. 思いやり　j. 健康・体力づくり　k. チームワーク　l. 助け合いの精神　m. 喜び・感動

n. チャレンジ精神　o. 集中力　p. 心のあり方　q. 体を動かす楽しさ　r. 行動力　s. 素直さ

t. その他（　　）

質問Ⅰ-②：上記の質問（質問Ⅰ-①）の解答に関して，それを選んだ理由を簡単に記述してください．

質問Ⅱ-①：教職を志す上において「生涯スポーツ」の授業から，今後どのようなことを役立てることができると考えますか．以下の語群ア～トより4つまで選んで（4つ以下でも可）その記号を解答欄に記入してください．
その他の場合はト.の記号を選択解答して語群のカッコ内（　）に適する語句を直接記述してください．

【語　群】

ア. コミュニケーション力　イ. リーダーシップ　ウ. 忍耐力　エ. 決断力　オ. 指導力　カ. 表現力

キ. 観察力　ク. 計画性　ケ. 創造力　コ. 体を動かす楽しさ　サ. 人間関係の構築　シ. 自主性

ス. 健康・体力づくり　セ.洞察力　ソ. 教育的配慮　タ. 勤勉性　チ. 社会性　ツ. 実行力　テ. 心のあり方

ト. その他（　　）

質問Ⅱ-②：上記の質問（質問Ⅱ-①）の解答に関して，それを選んだ理由を簡単に記述してください．

職に就いてからもさまざまな場面において活かすことができるような研究として行きたい。

2. 研究の方法

調査の方法として，A 短期大学の教職課程における「生涯スポーツ」の授業を履修している学生を対象に，無記名自記式の選択及び記述の質問紙調査を 2012 年度前期終回時，それぞれの担当教員の授業に当日出席している計 70 人の学生に対して合同で実施した。

調査の回答時間に関しては約 20 分とした。調査の実施に際しては，質問紙最初に研究調査の目的内容を記載し，論文として発表する同意を得た上で調査を進行した。

質問項目と内容に関して，本研究では二つの質問項目を取り上げ，前頁の表 1 に示した。

質問による各選択肢（語群）に関して，広義に同じような意味内容を表す語句もあると考えられたが, 被験者へ直接的に言葉が届くことを考えて，その語句を使用した。

データの解析方法として，得られた選択肢の被選択数を単純集計し，結果として図に示した。さらに，被選択数によって明らかになった結果からグループ分け等を行うことで，その傾向性などを探り，図に示してそれを考察した。また，それらの選択肢を選んだ理由の記述に関して，特徴的な一部を抽出し，回答の趣旨を損なわないよう筆者が修正を加えて記述した。

3. 結果及び考察

3－1. 多様化する学生の資質を高めるために

質問Ⅰ－①における教職を志す上において「生涯スポーツ」の授業から学ぶことができたことに関しての被選択数の結果を図 1 に示した。

図 1 における被選択数による上位の選択肢では「チームワーク」,「コミュニケーション力」,「体を動かす楽しさ」,「仲間づくり」,「健康・体力づくり」,「喜び・感動」,「チャレンジ精神」,「助け合いの精神」などの回答が上位を占める結果であった。

高等教育における「生涯スポーツ」の授業は，これまでの小学校，中学校，高校までの体育とは異なり，基本的に週一回の 15 週で実施され，一回あたりの授業時間が 90 分で構成されている。

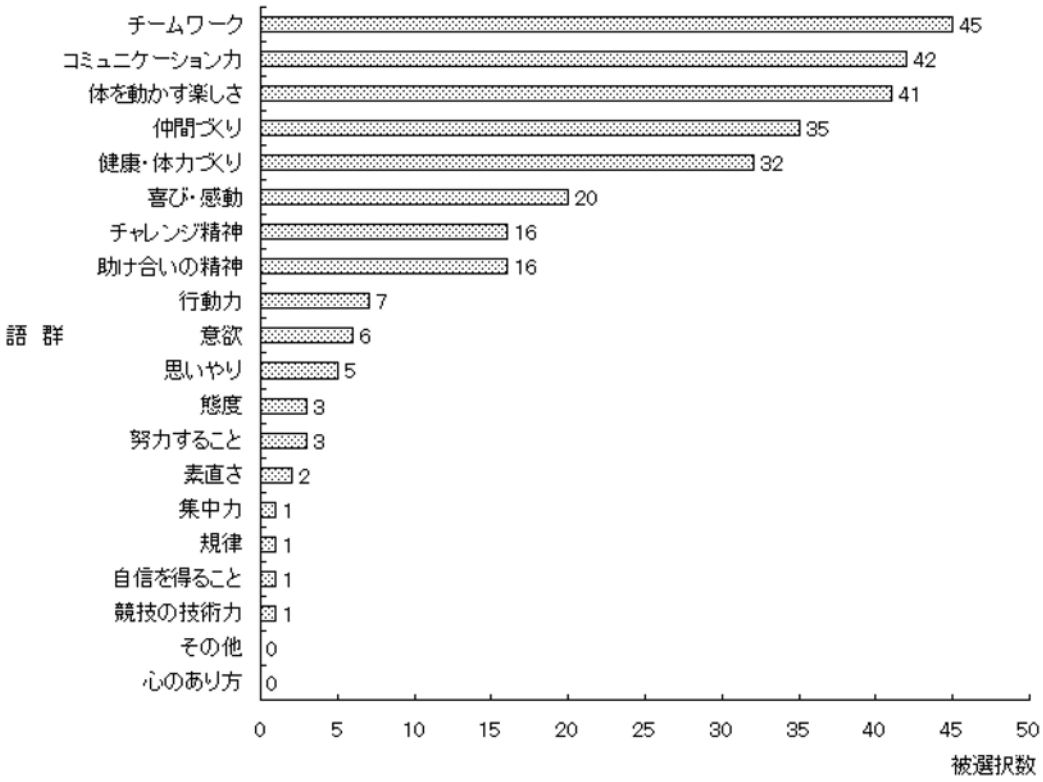

図 1. 教職を志す学生の生涯スポーツの授業から学んだことに関する調査.（2012 池田，松﨑，相原，他）

また，これまでに中学，高校などの課外活動として行っていた運動部活動に至っては，学生の自治としての体育会運動部などに自主的に入部して活動しない限り，運動することは減少していくことが考えられる。つまり，スポーツに携わっている学生と，運動を実施することがあまりない学生の傾向性が見られるのではないかと考えられる。授業では，そのことに関する垣根を取り払うことからはじめ，運動することが得意な学生も運動することが得意ではない学生も上手く融合することができるように努めていくことから授業づくりを始めていかなければならないと考える。

その理由として，教職に就いてから，あるいは社会人となってから，たくさんのさまざまな人たちと関わり合いを持たなくてはならないのでありスポーツができることよりも，むしろ，たくさんの人に興味を持っていくことが教職へ向けての歩みとして大切なことではないかと考える。そして，そこから，児童，生徒，保護者，地域の方々とのふれ合いを通して，ともに手を携え，励んでいく姿勢が求められていくものと考える。

伊藤ら[2]によると，教員の資質･能力について，「いずれにしても，望ましい教員像とは，社会から信頼される，児童・生徒から信頼される，親から信頼される，の３者から信頼される教員であれば問題はない，しかし，現実は簡単ではない，その中でも生徒から信頼される教員であることがなによりも大切である」と述べられている。つまり，児童，生徒から信頼されるようになるということは，表面上だけのコミュニケーションではなく，常に，子どもたちとの関わり合いを持ち，児童・生徒と同じ目線にも立つことから子どもを理解する力を高めて，見守っていくことが望ましいのではないかと考える。

宮崎ら[4]によれば，求められている教員の資質について，「語る人によってその内容や強調される点が区々であり，それらすべてを網羅的に掲げることは不可能であるが，今日の社会の状況や学校・教員をめぐる諸問題を念頭に置くと，その一つに，得意分野を持つ個性豊かな教員の必要性」を挙げて述べられている。このことについて，それぞれの得意分野とは如何なるものであるかに関して，体を動かすこと，話をすること，絵を描くこと等々，スポーツ・文化を問わずさまざまな分野が考えられるが，これらを活かして児童・生徒の心をとらえることができるように，教員に対して興味を持ってくれるようになることが大切であると考える。例えば，バレーボールが得意であれば，その技術の一つであるスパイクなどを見せてやること，サッカーであればドリブルやシュートなど，より本物に近いものを体感させて興味，関心を持たせて引き付けることが重要であると考える。それはプロフェッショナルなスポーツとして見た高い技術力ではなく，そこには教職としての情熱が込められていなければならないと考える。このことについては，学生が社会に出ていく際に，どのようなことに興味関心を持っているのか，得意なものは何であるかということについて関連することで，それは自らを成長させるために重要なことであり，これらのことについては，必ずしもスポーツの分野に限らず，芸術・文化・科学など，どのような分野でも社会的に通用するものであると考える。

授業では，それぞれの生涯スポーツ担当教員による種目において，「バレーボール」や「バスケットボール」などのチームスポーツの種目が開講されていた。そうした状況のなかで，これまでの学校体育や課外活動，あるいは地域のクラブ活動において，その種目を経験してきた熟練者がいることを考えなくてはならない。前述したように，未経験者であって運動することが得意ではない学生がいることも考えられることから，チーム編成には，一方的な偏りがないように工夫することで，学生たちへの学びの場を提供することが必要であると考える。一例として，経験者や運動することが得意な学生だけが重複しないように分けるのも一つの方法であると考え，本授業における各グループは運動経験をもとにした均等な力配分が必要になるものと考えた。

3－2. 教職に向けて自らと他者との関係を考える

図１の結果をふまえて，図２では上位の回答を占めた被選択数から，「生涯スポーツ」から教職を志す上での学びに関することについて図に示したものである。

図２では，「チームワーク」，「コミュニケーション」，「仲間づくり」などに関することを「人との和を築く学び」の場としてまとめることにした。自らと他者との関係を通して，お互いの違いを理解し，深め合うことが必要であることに気づき，これについて，生涯スポーツの授業から大いに学ばせなければならないことであると考える。これから，社会へ，そして教職への一歩を踏み出していく上において，修得していかねばならないことも増えるものと考える。その一つに「コミュニケーション力」が挙げられるのではないかと考える。

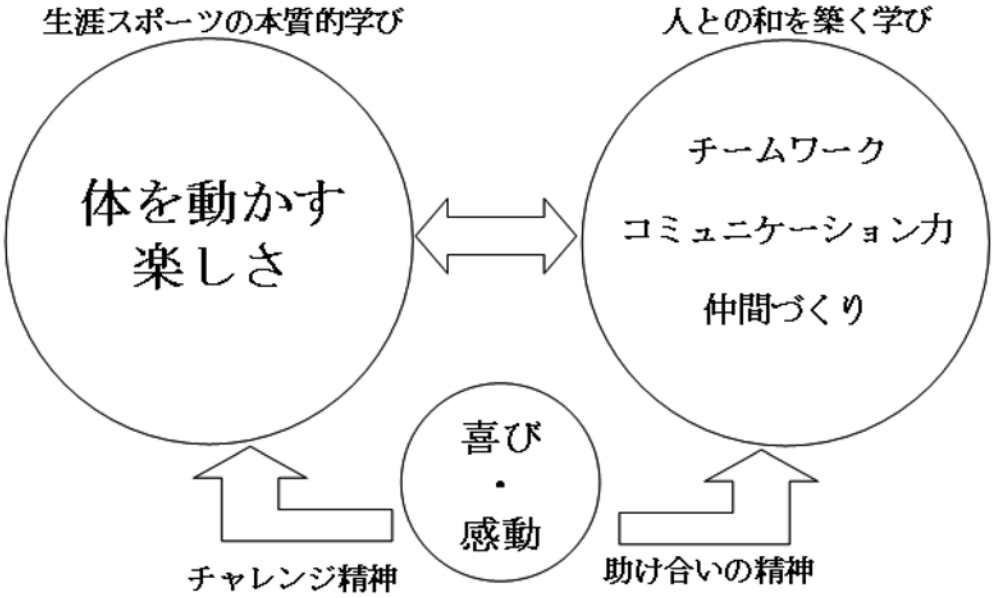

図 2. 教職を志す学生の生涯スポーツの授業における学びに関することについての調査から.（2012 池田，松﨑，相原，他）

それは，これまでにあまり関わり合いを持ってこなかった人たちともコミュニケーションを図っていくことができなければならないのであって，同時に自らの意見も持ち合わせ，それを述べていかねばならないのであると考える。そして，相手の話しを聴き，相手を思いやる態度も必要になってくるものと考えられる。

授業の場面では，試合前やハーフタイムなどに作戦タイムを設け，積極的に話し合いの場を設定することにした。それにより，自主的に円陣を組んだり，みんなで掛け声を出し合ったり，車座になって話し合う姿が見られ，学生自身による普段の言葉と態度で考えさせることから，自主的に学び合う授業が実施されているものと考える。また，ここにおいて担当教員はその場へ深く関与するのではなく，見守る態度に徹したことで学生らによる活発なる意見の交換があったものではないかと考える。

そこで，学生の意見交換などに関することを考えていくものとする。浅沼ら[1] による活用型学習に関して報告されていることの一つに「ひらめき」に関することについて，一つの例として「いびつな形をした面積を求める場合を例として，公式として先に教えるのか，それとも，正解を教えず，誘導しながら生徒が発見するまで待つのか，概念的な学習としては，面積の公式というものしかなく，面積をつなげるという公式が生活場面で工夫することによってより複雑な問題を解くことが可能になるということが活用型であり，それは教えるのではなく発見する過程が活用型の力になるのであって，なぜならば，活用する主体はあくまでも学習者である」と述べられている。

このことから，チーム内において，誰をどのように活かすことができるのかなどに関したことを発見することや，それを実行するには，さまざまな視点や観察が必要となるが，その得られた特性を活かすためには，チーム全体としての努力を各々が目標を遂行するために取り組んでいかねばならないと考える。そこにおいては，学生同士の活発なる意見の申し合いが必須となるが，さらに，人間関係の和を築いていくための調整する力も必要となってくるものと考えられる。

スポーツの場面では，しばしば強引とも見られるスタンドプレーもあるが，緊迫した場面での集団においては，和を重んじて行動しなければ大きな混乱を招くことも考えられる。例えは，災害時などがこれに該当すると考えられる。自らのことが大切なことは当然ではあるが，自らを活かすためにも調和するところを考え見つけていかなければ，最善なる方向へものごとは進んで行かないものと考える。スポーツの場面に置き換えると，シュートを打つ，スパイクを打つばかりとは限らず，アシストする人，ボールをつなぐ人などのサポートに回る人の重要性に気づくことができれば，すなわち「助け合いの精神」が如何に大切なることであるかを学ぶきっかけになると考える。

教育現場においては，子どもたちに秩序ある社会性を教え築いていくなかで，自らが率先して行動することで，それを示していかねばならない。そこでは，例えば，他の教員と協力し合うことによる学校行事や地域への貢献などを通して，人との和を築いていくことにあると考える。

教職課程研究会 編[3] による地域社会から信頼される教員となることについて「日常的な学校における教員の言動は，児童・生徒の成長に直接に大きな影響を与えるので，教員は自身の言動を常に自省しながら，一人一人の児童・生徒が個性豊かに健やかに成長するように援助の手を差し伸べる必要がある。このことにより，児童・生徒はもとより保護者や地域社会から信頼される教員が生まれる。つまり，児童・生徒，保護者をはじめとして地域の人々からの信頼が得られなければ，教育の基盤が揺るぎ，学校教育は成り立たない。そのためには，教員自身が地域社会に飛び出て，地域社会から学ぶ姿勢が必要である。この学校と地域社会との連携により，お互いの信頼関係が一層深まり，学校も，地域社会も互いに活性化することになる」と述べられている。

このことからも，人と関わり合うことによって得られる学びは，自らを高めて行くことはもとより，教職としてあるべき姿とは，ものごとへの姿勢や行動，態度に示しながら学生に教育していかねばならないと考える。そして，その学びから得られた姿勢を子どもたちに教え，伝えていかなければならないと考える。それは決して技術の出来ばえではなく，懸命になって励むことで得られることを示すものと考える。つまり，教職を志す学生はその学ぶ姿勢を身に付けていくべきであると考える。

3－3. 教職を志す学生と教員の授業観について

質問Ⅰ－②では，質問Ⅰ－①の回答に関して，それを選んだ理由についての記述によるところから，「生涯スポーツの授業を通して，自然とコミュニケーション力が図られ，チームの力を高めて取り組むことができた」，「どうしたら勝てるのだろうかと話し合い，協力していくうちにコミュニケーション力が身についた」との記述により，教職を志す学生は，本授業におけるねらいを汲み取ることで，コミュニケーション力などが図られたのではないかと考える。そして，そのねらいとは生涯スポーツ担当教員による授業計画の中に含まれ，瞬時に刻々と変化していく授業の場面から得られる効果をイメージして折り込んでいくことにあるのではないかと考える。そこでは，図２からも言えるように「喜び・感動」が得られ，それが根底にあることで，さまざまな分野に及ぼすことができるような総合的な「力の育成」として，つなげていくことを考えていかねばならないものと考える。

記述には「この授業を通して仲良くなれた人がたくさん出来て，その仲間と喜びを共有できることが楽しかった」，「知らない友達とのグループであったが，コミュニケーションが自然発生して試合をしていく過程において絆も深まり喜びを分かち合うことができた」などの記述が見られた。また，「仲間づくりによってチームワークが生まれ，一緒に活動することで私も頑張ろうというチャレンジ精神が向上した」，「人とのコミュニケーションが上手く行けばチームワークもよくなるし，助け合いの精神が生まれてくると思った，スポーツをすることが苦手であっても，チャレンジする精神を持っていれば，自分自身が楽しむことができて，積極的に行動すると思う」などの記述も確認された。これらのことから，教職を志している学生の生涯スポーツの授業に関しては，学びの場をしっかりと提供し，大枠を整備することで，学生自らがそれぞれの役割を感じ取り，お互いに学び合うことが考えられる。このことについて，全てを与えるような教授をしていく方法によらないことで，教育学的に無限の可能性を持ち，二つとない価値ある授業の実施と展開が考えられる。

その無限の可能性を持った授業展開を実施するためには，「生涯スポーツ」としての本質的な学びを伝えていくことにあるのではないかと考える。スポーツとは本来楽しむべきものであり，健康の維持増進はもとより，日頃の疲れやストレスなど体を動かすことでリラックスさせ，汗を流すことによりそれを発散させて活力を生んで行くものと考えられる。

記述による「体を動かす楽しさ」に関することでは，「自分の体調に合わせたスポーツから体を動かす楽しさを知った」，「久しぶりにスポーツをする機会を与えられて体を動かす楽しさを心から感じとることができた」，「積極的に参加することで楽しいと思えることの大切さを学んだ」，「集団で行う競技から，人とのコミュニケーションの方法について考え学んだ，競技をすることが得意な人もいれば苦手な人もいるなかで，一つのチームとしてお互いに支え合いチャレンジすることで体を動かす楽しさを知った」などの記述が見られた。

これまでの小学校，中学校，高校までの生活と

は異なり，体を動かす機会が減っていることで，生涯スポーツの授業を楽しみにとらえていることも考えられる。与えられている授業としてではなく，自らが求める姿勢として授業が存在していることが考えられた。そこには自分のペースで良いからという教育学的な配慮とする助言も生涯スポーツ担当教員には必要とされるものと考えられる。しかしながら，全てにわたる学生が体を動かすことが楽しいと感じているとは限らないことも考えられる。もちろん，楽しいということを一つのきっかけとして学ばせることは，「チームワーク」や「コミュニケーション力」などを身に付けさせる方法であると考えられるが，さらに，生きていくための力の一つとして，防災や防犯に対する意識を高めることにより，総合的な力の育成として，これらの技術が教職に就いてから，あるいは今後，社会生活を営む上においても役立つことが考えられのではないかとの含みを持たせることで，これらを学ばせていくのも一つの方法ではないかと考える。

3－4. 質問Ⅰに関するまとめ

教職を志す上での学びに関することとして，図1の結果及び図2から，喜びや感動を一つの支えとした授業観においてでは，生涯スポーツの本質的な学びにつながることも考えられ，授業の基礎的な柱となる「体を動かすことの楽しさ」が得られることであり，人との和を築いて行く学びの場とすることで教育学的に良い効果が考えられる。そして，喜びや感動が得られるような授業を生涯スポーツ担当教員は学生に提供し，しっかり整備していくことで，学生は自らが考えて行動し，さまざまな教育的場面で必要とされる姿勢と技術を修得していくものと考えられる。そこから，助け合いの精神やチャレンジ精神も生まれ，ともに手を携えて，協力し合うことが考えられた。

3－5. 役立つことを直接的，間接的にとらえて

質問Ⅱ－①における教職を志す上において「生涯スポーツ」の授業から，今後どのようなことを役立てることができると考えるのかに関する被選択数の結果を図3に示した。

図3における被選択数による上位の選択肢は「コミュニケーション力」,「健康・体力づくり」,「体を動かす楽しさ」,「人間関係の構築」,「自主性」,「観察力」,「忍耐力」,「実行力」,「リーダーシップ」

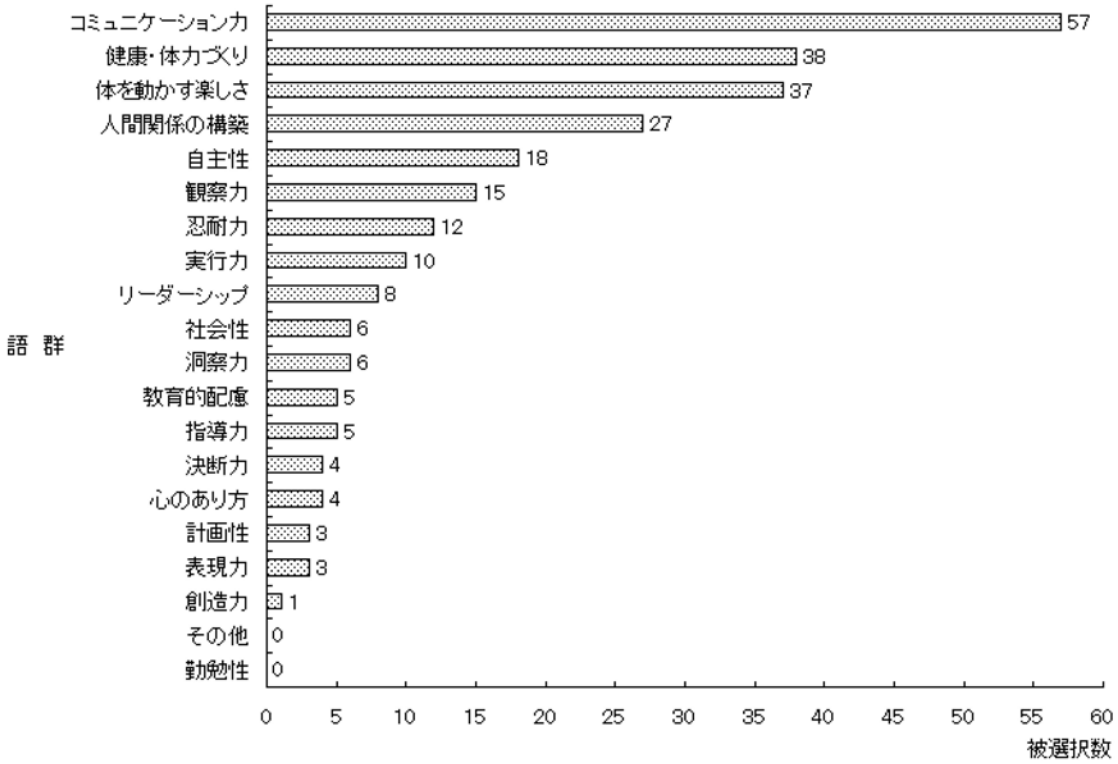

図3. 教職を志す学生の生涯スポーツの授業から役立てることに関する調査.（2012池田, 松﨑, 相原，他）

などの回答が上位を占める結果であった。

さて，役に立つということを概念的に考えていくために，今の学生がこのことについてどのようにとらえているのかを考える必要もある。それは，今後卒業して，社会に出て行く際において，すぐに役立つものとしての資格や技術を習得し，即戦力として活躍することにあると考えているのかも知れないと考える。なぜなら，現代の社会的風潮から人を育てるという側面にコストをかけず，すでにそれを備えた人を就職させる傾向にあるのではないかと考える。時代と経済的な傾向とは言えども，役に立つ，役に立たないという枠組みをそのようにとらえてしまうと思考の幅が狭くなり，そこから派生する力がかげり，ものごとに対するヒントやアイデアが生まれてくるチャンスを逸してしまうことが考えられる。つまり，役に立つということを今置かれている状況だけでとらえてしまうと，将来的なものごととしての考えが及ばなくなってしまう恐れもあると考える。それは，いつ，どこで，どのようなことが役に立つのかということに関して，大局的にとらえることが難しくなることを示すものであるが，学ぶ，勉強するということは「何か困ったときに役に立つこと」を言うものであると考え，その何があるかわからない将来に備え，それを考えていくことこそ価値あるものと考えることができる。

生涯スポーツ担当教員から教職を志す学生への問い掛けと助言の一つに，もし，災害などの危機迫るときに車の中に閉じ込められてドアが開かなくなったら，車内にある何かを使ったり，自分の体のどこかを上手く使ってガラスを蹴破ってでも脱出しなければならないこと，また，何か重い物の下敷きになったとしても，冷静になって少しでも重いものをズラして隙間などを作っていかなければならないことを述べていることから，本当の意味で生きていく力の育成を図りたいという願いがあったのではないかと考える。当然これらはすぐに役立つことではなく，このような場面に遭遇しない方がよいに決まっている。しかし，知らないよりも知っていた方がよいことであり，気力や胆力を発揮できる訓練と準備は必要であることが考えられる。つまり，何か未知のことではあるが，日々のニュースや社会情勢からその何かを想像し考えていくことが大切なことであると考える。そのような意味においても，本授業における生涯スポーツの授業としての役割は大きく，これらのことについても教職を志す学生に修得させておきたいことがらの一つでもある。中嶋[5] による教師に必要な資質の中に，「子どもを守る危機管理者として」の章では，ケガや事故への対応から，いざという時に慌てないため，万が一の時に備えることの重要性について記述されている。

そのような現代社会において本授業では，実際に体を動かして実施している競技に直接的に関連のない動きであっても導入の一つとして取り入れ，学生は何らかの場面において漠然とではあるが，もしかしたら役に立つことがあるのかも知れないと考えて体を動かしていたのではないかと考える。授業にて，体を温める準備運動の一つに赤ちゃんのようにハイハイして進む動きなどを取り入れることで，学生は興味関心を示しながら楽しく取り組む姿が見られた。しかし，楽しいばかりではなく，あくまでもねらいがあることを補足しておかなくてはならない。それは全身運動をすることで体のさまざまな部位が鍛えられる効果が考えられる。あるいは，防災などに対する意識を高める上で考えさせる動きも必要なことであり，これについての助言も要するものと考える。もし，煙に巻かれたらどう対処すればよいのか，狭い場所で低い姿勢をとるにはどのようにすべきかといった場面を想像しながら取り組むことも一案である。馬跳びにしても学生らは楽しく行っているが，何らかの障害物を飛び越えるために跳躍力をつけなければならないとの想定を考えることで，生きていく力の育成に間接的に関わる授業であることも必要なことであると考える。

さらに，球技の授業におけるパス回しの練習では，その動きを実施するために直接的に必要となる「つなぐ」という意識をみんなで目的を達成するために，自らと他者との関係を築いていくことが重要な位置づけとなってくることが考えられ，そこに教職を志す学生に対しての教育学的なねらいが直接的に含まれているものと考える。それは，仲間に対してボールを渡すタイミングやスピード，高低などを相手の立場も考えねば目的は達成されないことから，本授業では，瞬間的に総合的な判断を要する力の育成が図られる場であると考えることができる。

3−6. 総合的なる人間の力を高める

図３の結果をふまえて，図４では上位を占めた被選択数から，教職を志す上で「生涯スポーツ」から役立つことに関することについて図に示したものである。

図４では，「力の育成」と「絆」とした二つの円から見つめたものであるが，「コミュニケーショ

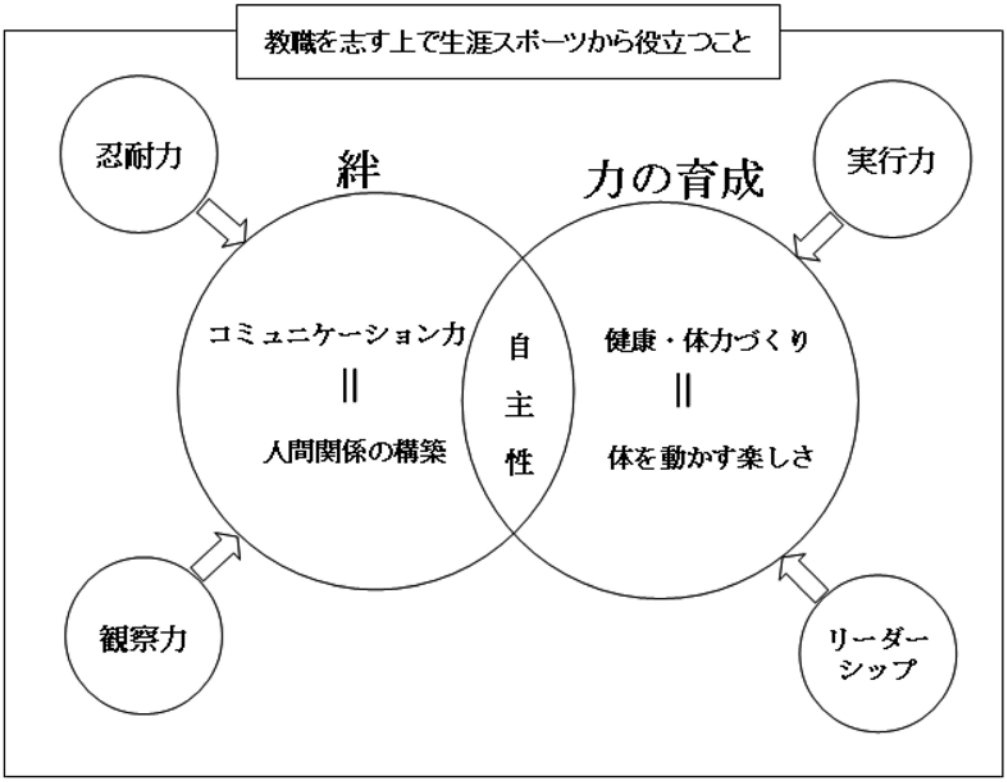

図 4. 教職を志す学生の生涯スポーツの授業から役立てることに関する調査から.
（2012 池田，松﨑，相原，他）

ン力」と「人間関係の構築」が教職を志していく上で役に立つとの意見回答があったことにより，そこで，その背後に何が備わっていなければならないのか，また，その二つを支えているものはどのようなことであるかについて考えていかねばならない。その一つに「忍耐力」と「観察力」ということに着目して考察していきたいと考える。

質問Ⅱ－②では，質問Ⅱ－①の回答に関して，それを選んだ理由についての記述によるところから,「他のチームの試合を観ることから，そのチームの良いところなどを発見することで，自分たちのチームに役立てたい」,「この人はこのようなプレーをするのだということをしっかり観察して，チーム内で話し合いながらプレーに役立てる」,「観察力を選んだのは，他の人を観察することでその人が何が得意かを見極める必要があると思ったから」,「スポーツをすることは少し忍耐力も必要だと思う，そこでメンタル的にも強くなるのではないかと思った」,「できなかった時に教えることができる指導力とともに，その課題となるべきことを見つけることができるのは観察力」,「忍耐力がなければ就職しても続かないこともあると思う，さまざまな人たちがいることを知り行動すること」などの記述がみられた。

それらをふまえて，教職を志す上においては，あるいは，人を指導していくことに関することは，粘り強く，根気強く指導していかねばならないことが考えられる。短気を起こして怒鳴ったり，投げやりな言動は慎まなければならないのであり，そこが忍耐力，あるいは我慢すべきところでないかと考える。チームの中においては，運動することが得意な人もいれば，不得手な人もいること，そして，一人ひとりの体格や性格も異なる中において，自分と他者との違いに気が付くことができれば生涯スポーツにおける教育学的な意義として大きいことが考えられる。しかしながら，自分ができることだけをイメージして他者に押し付けてしまうことは他者に対して行ってはならないのであり，また思い通りにならないことを重く受け止め，それによってフラストレーションが溜まりさまざまなことに負の影響をもたらすことも考えられる。それは，他者の顔色を伺いながら行動するということではなく，ひとつの目標に向かって行動をともにしなければならない時，いかにして他者の得意なところや良い部分を引き出していかねばならないことを示すものである。

米山ら[6]による教師の人間的条件としての資質について「教師の役割は，未完成の児童・生徒が生活のなかで突き当たる問題に対して，その基本的な対処の仕方を，学習の場に限らず，形成し援助・支援していくことにある。またそこから，1人ひとりの固有の価値可能性を実現させ，人格の主体的形成をめざすべく協力することにある」と述べられている。また，吉本ら[7]は，体罰に関することについて，「教師がその場の衝動に駆られてカッとなり，瞬間的，感情的に行っていることや自分の考えに従わせようとする管理的，権威的な教師の意志が強く働いていることが伺え，この時，理性が失われ，心は子どもから離れてしまっている」と述べられている。これらのことからも，生涯スポーツの一場面ではあるが，これまでの小・中・高での顔なじみとは異なり，知らない人たちとも関わり合いを持ってチームを構成し，かつプレーを実践していくことは，それぞれの学生の気持ちの中でさまざまな葛藤があるものと示唆される。つまり，言うべきことではないこと，あるいは伝えねばならないこと，さらには，やるべきこと，やってはいけないことなどについて，教職を志していく上において，しっかりと考えて行動することにあることから，教育学的に修錬の場として本授業が位置づけられているのではないかと考えられる。そして，これらの内面たる思いについて，教職を志している今であるからこそ，それを体感することで，子どもたちに接していくときに役に立つことができるのではないかと考える。つまり，コミュニケーション力や人間関係を構築していくことは，意見の衝突やぶつかり合いばかりでは進歩は生まれてこないのであって，全てにおいて自らの意見を控えよと言うものではなく，チーム力を発揮して進んでいくためには，さまざまな意見やアイデアを出し合いながら，最善を尽くす姿勢が求められるのではないかと考える。特に，前頁（質問Ⅰ－①）にて述べた非常に緊迫した場面などでは，このような力が生きていく上において必要であると考え，これらのことを備えていなければ無用なる混乱を生じさせることも考えられる。そして，このことは人間同士の絆を深めていくためにも学んでいかねばならないことであって，チーム力とはスペシャリストとオールラウンダーの融合体として仲間との絆を深めていくものと考える。

次に，「リーダーシップ」と「実行力」に関して，教職を志す上でどのように考えていくべきことであるかに着目した。一つにリーダーシップを発揮して，チームや集団をまとめていく力が必要になること，また学校社会においてはこれを要求されることがあるものと考えられる。そして，さまざまな意見やアイデアから，これらを集約してまとめ上げ，実際に行動する実行力も必要になってくることが考えられる。そこで，これらのことについても一つの修練の場として，生涯スポーツの授業があるものと位置づけることで，本授業において，さまざまな教育学的な含みを込めながら教職を志す学生の力の育成に努めていかねばならないと考える。例えば，何かを行使する際，みんなの前に出て最初のひとりになる時がこれにあたる。実技などの場合，最初であることは何か気恥ずかしい思いや注目されることに慣れていないことから，持っている力の発揮がなされないこともあると考えられるが，学生自身としては心のなかで教職を志している自らを意識しているためか，前に出たい思いも混在しているものと考えられる。そこで，この見えない壁を払拭することができるよう，生涯スポーツ担当教員はこれに力を尽くし，学生が力を発揮することができる環境を整備していかねばならないと考える。また，全ての行程を学生自身が主体的に実践するように求めた場合，ある一部分だけが適応できない学生にとっては，全ての行動が上手くいかなくなってしまうことも考えられる。であるがこそ，適切なる言葉をかけることが必要であり，助言が要求とされるのではないかと考える。これは，「教育学」においても「スポーツのコーチ学」においても相違することはなく，同じことではないかと考える。自らと他者との違いに関するところでも述べたように，少し背中を押してやることや持っている力を上手く引き出してやることであって，全てを指導し，教えようとしないで，苦手としている一部分だけに指導を行っていく姿勢が必要となるのではないかと考える。

3－7. 今を，将来を生きていく本当の力の育成について

3－6. にて前述したことに関する学生の記述によるところでは，「社会に出てからも何事にも積極的に取り組んでいくことが大切であると思い，決定する力も必要となると思う」，「人間を相手にする職業ではコミュニケーション力は不可欠であり，自分の考えを相手に伝え，行動する力は必要」，「作戦を考えるときに，チームの人に自分が思っていることを分かりやすく伝えなければならなかったので，表現力や指導力が身に付いたと思

う，将来，自分の思ったことを分かりやすく伝える時に役立てると思った」などの記述があったことから，社会に出てから，あるいは将来教職に就いていく上で修得しておかねばならないことであると感じとっていることが考えられる。それは，高校より進学する際における学校選択を始めとした思いから，実際に教職課程を履修していく環境に自らを置いて，さまざまな教科を学んでいることにより教職に対する意識を強めていることが考えられる。生涯スポーツの授業では，上記した内容に関することを具体的に体を使って表現しなければならないのであって，力の育成ということに関しては，実際に体を動かしながらの人と人とのコミュニティーづくりや健康を考えた体力づくりを直接実践していくことになる。そして，それらはあくまでも授業という枠組みの中ではあるが，教職を志す上において自主性を伴うものでなければならないと考える。それは，強制されるものではなくて，自らが追い求めることができるように支援をしていく体制が必要なことではないかと考えることができる。

引き続いての記述によるところでは「チームで動いていく上で自主性が大切であると思った，それは誰か一人だけで動くのではなく，自分から動くことで協力し合える大切さが分かったから」，「自ら動くことで周りの人とも関わりを持つことができ，率先して自分から動くことで周りの人たちにも影響を与えていく」などの記述が見られた。そして，自らの行動を社会に関連付けさせる意見として，「積極性や自主性は社会に出るにあたって必要とされることであると思う」，「自主性についても社会に出るときに求められると思う」などの記述も回答されていることから，自らが学ぶべき力と社会が要求しているものを良く理解していることではないかと考える。生涯スポーツに関する学びとは，コートの上だけを示すのではなく，授業の用具準備から挨拶，片付けに至るまで，さらには，チームなどを通してのコミュニケーション力を図る実践の場でもあり，人間関係を学んでいく教育の場でもあると考える。そこでは，それらを円滑に学ばせるため，生涯スポーツ担当教員として適切なる支援が必要になることが考えられ，3−6. のところでも前述したように，教職を志す学生にあっては，最初から最後までの全てを指導していくという姿勢ではなく，苦手としているところに声をかけていくなどの支援をすること，さらには，その教育の場を設定することであり，それによって，学ぶ力を発揮することができるようにするものではないかと考える。それがねらいの一つとして定めた「力の育成」に関連づけられることなのではないかと考える。

学生の記述には，「子どもと将来かかわる仕事に就きたいと考えているので，体力が必要になると思う，授業において日頃できる運動などを学ぶことができたので，今後も体力維持に努めたいと思う」，「養護教諭になるからにはコミュニケーション力が必要であり，健康・体力づくりは指導する立場になったときに必要になると思う」，「養護教諭を目指しているので，健康に関することに深く関心を持つ必要があると思った」などの記述では，具体的な教職種から自分の将来における教諭としての決意的な意見も見られた。つまり，教職を志す学生として社会に出る際に必要とされる力に関することと，本授業で得られた力をさらに練り上げて自らを発信源として，子どもたちにメッセージ性を以って大きな力としていくためには，今と将来を生きていく本当の力の育成が必要となるのではないかと考える。キレないで，落ちついてものごとを考え，行動していくことができる子どもを育てていくためには，その子どもたちを指導していくことになる教職を志す学生に，しっかりとした教育を行っていくことに他ならないと考える。学生の記述に，「健康のためにも体を動かすことはとても大切なことだと思った，それは体だけではなく，心の健康であっても同じであると気がつくことができた」との回答があった。ここで言う「心の健康」という言葉が出てきたことにより，体力とは身体的なフィジカルとしての機能ばかりをいうのではなく，気持ちの面での充実や心身についてのことも示唆しているのではないかと考える。単にスポーツができる，できない，を述べるのではなくて，心とからだの健康のことを全体的に示していることであると考える。そして，このことが人間の生命を考え，優しさや思いやりを持った，人間として生きていくことの強さにつながってくるのだと考える。

3−8. 質問Ⅱに関するまとめ

教職を志す上での生涯スポーツから役立つことに関して，図３の結果及び図４から，人間関係の絆を強め，深めていくためには，コミュニケーション力を高めたり，円滑なる人間関係を築いて行くことに他ならないのであるが，それを実現していくためには自らと他者との関係を考えた行動をしていくことが必要であることが考えられた。そこには，自らの欲求を押すばかりの態度ではなく，

対話する，聴く姿勢も必要であり，ときにはチームプレーに徹するために我慢することも必要であることを学んでいることが考えられた。さらに，他者が何を求めているのか，また，全てを活かしていくために最善の選択はどのようなことであるかを観察して，それを実行する力も必要であることが考えられた。そして，チームをまとめるリーダーシップ性も発揮できるような力を身に付けていかねばならないのであり，誰かがやってくれるだろうという態度では教職を志す学生としては不足であり，力の育成の場として多くのことを吸収し修得するためには，自主性を前面に出して学んでいかねばならないのであると考える。さらにその授業づくりを支援する形として，生涯スポーツ担当教員が授業を練り上げ，学生が将来，教職に就いたり，社会に出る際において，また，生きていくための防災や防犯に対することに関連づけることで，必要となることを広く考えて行動することができるような力としての育成に努めることにあると考える。

4. まとめ

4－1. 本研究は，教職を志す生涯スポーツの受講生を対象とした授業観に関する研究であり，今後，子どもの教育に携わる学生の実践力や資質などを学生と生涯スポーツ担当教員の双方からの授業観に基づき教育学的に考察していくことを目的としたものである。授業ではチームスポーツやチームプレーとしての本質を理解させるために，防災や防犯に関連づけるような動きなどを導入したりすることで，その効力を発揮する場面を考えさせ，想像させるために，教職としての力の育成を目指していくものであった。調査の方法は，無記名自記式の選択及び記述の質問紙調査を実施し，本研究では教職を志す上において生涯スポーツの授業から学ぶことができたこととその理由について，今後に役立てることができると考えることとその理由についての二項目を取り上げて考察した。

4－2. 教職を志す上において「生涯スポーツ」の授業から学ぶことができたことに関して，チームワーク，コミュニケーション力，体を動かす楽しさ，仲間づくり，健康･体力づくり，喜び･感動，チャレンジ精神，助け合いの精神，などの回答が上位を占める結果であった。授業では，今後，学生が教職に携わっていく上では，人との関わり合いを避けることはできないと考え，生涯スポーツ担当教員は，種目や競技特性をよく考え，さまざまな角度から授業を工夫し，学生が学ぶことへの深みを感じ持たせることができるような努力を継続していく必要があると考える。また，教育の場を整備，支援することについても同じことが言えると考える。さらに，教職を志す学生においては，チームスポーツにおいてコミュニケーション力をはじめとして，仲間との喜び・感動を共有することで，実際に授業を通して，観て感じ，考えたことを授業の中やチーム内において相互に学び合っていることが考えられる。そのような中で，生涯スポーツ担当教員は全てを指導していくような授業ではなく，学生が持っている力を上手く引き出すような授業を実践していくため，教育学的な本質としての学びを伝えていくことにあることが考えられた。そこから，学生自身も生涯スポーツの授業を「楽しむ」ということを見い出すことができたものと考えた。それは，体を動かしていくことは，肉体的な苦痛を伴う場合もあると考えられるが，そこに教育学的な含みを持たせて配慮することにより，運動することが不得手な学生にも学びの場を提供することができると考え，それぞれのペースや役割に応じた学びを深めていくことができるものと考えた。しかし，全ての学生が体を動かすことに楽しみを感じているとも限らないと考え，チームワークやコミュニケーション力を学ぶことにより，防災や防犯に対する意識を高めることで，これらの技術が教職となってから本質的な力の一つとして役立つことにつなげ，総合的な力の育成を図ったものとすることにあった。

4－3. 教職を志す上において「生涯スポーツ」の授業から役立てることができることに関して，コミュニケーション力，健康・体力づくり，体を動かす楽しさ，人間関係の構築，自主性，観察力，忍耐力，実行力，リーダーシップなどの回答が上位を占める結果であった。生涯スポーツ担当教員の授業づくりに関して，役に立つという概念を，就職するためだけのものではなく，何か困ったときに役に立つこととしてとらえ，防災や防犯に対する意識を高める一つの方法として授業にて工夫して取り入れ，その役立てる動きを実践することにした。さらに，球技でのパス回しでは，相手との関係を築いていかなければ目的は達成することができないことを気づかせるような教育学的な含みも持たせて授業を構成し，そこから観察力や忍耐力に発展させて，自らと他者との違いに気づくことができるようにした。ここでは，無理な押し

付けや意見の衝突だけの人間関係ではチーム内の歪みが大きく，建設的に前に進むことが難しくなり，人間関係のもろさが考えられた。特に集団として力を発揮して最善を尽くさねばならない緊張した場面では，相手の立場に立った理解度が求められ，チーム内それぞれの役割としての力を発揮することが必要であることが考えられ，チーム力とは，スペシャリストとオールラウンダーの力の結集で絆を深めていくものと考えた。さらに，力を発揮していくことに不慣れな学生については，全てを自分で殻を破るような態度を求めるのではなく，苦手とする部分だけを補助してやることや助言をすることによって教育学的な環境を整え，持っている力を引き出してやることが肝要であると考えた。これにて，得意な分野はさらに伸び，苦手なところにも手が加わってくることで克服する道が考えられる。また，教職を志す学生がこれから社会に出る際においてもチャレンジしていく姿勢が言葉としても随所に見られ，自らと社会との接点を人間関係を通しての学びに重きを置いていることが考えられた。この生涯スポーツにおける学びとは，コートやフロアー上だけのことを示すのではなく，授業の準備から片付けまでを含めたトータル的なものを示すのであって，その場面，場面において，これまでの教職に関する教科などから学んでいることなどを考えながらそれぞれが力の育成に努めていることが示唆された。体力に関しては，身体的な機能だけを示すのではなくて，心に関することを示す場合もあることから，教職を志す学生と生涯スポーツ担当教員の双方がこのことに気づき，心身の健康を含めた人間の優しさや思いやりについても授業観の一つとして導き出すことができたものであった。

4－4. むすび

喜びや感動を支えに，それを感じとることができるような授業観を目指していくことは，生涯スポーツの本質的な学びとして「体を動かすことの楽しさ」が得られることであり，「人との和を築いていく学び」について教育学的に良い効果が考えられた。そこには適切なる授業を提供することであり，さらに支援することで，学生自らが考えて行動し，さまざまな教育的場面で必要とされる技術力を修得していくものと考えられる。そして，そこから助け合いの精神やチャレンジ精神が生まれ，ともに手を携えて学んでいくことが考えられた。生涯スポーツにおける教職を志す学生の学びや技術というものは，確固たる資格や技術のことではなく，学ぶことの姿勢や素養であり，その下地があることを前提として実際に教育の現場に入って経験を積み重ねて学んでいくものと考えられる。そして，これを身に付けさせる一助に生涯スポーツ担当教員の授業におけるアイデアや工夫があるものと考えられ，単に体づくりのみに止まらず，防災や防犯などに対する意識を持たせることで授業を構成することも一方法であると考えられる。そこでは，なぜ，コミュニケーション力が必要になるのかを考え，それを気づかせることができるような授業展開が必要であると考えた。そして，その教育方法が可能であることとして，教職を志している学生には，人間関係を築いていかなければならないという考えがもとより備わっており，学ぶ姿勢が日々の生活や他の教科等で修得されていることが考えられることから，体を動かすことや仲間との交流について，楽しさを基軸として学んでいることにあって，それは，苦痛だけを伴う授業だけの押し付けではないことから，生きていくための「力の育成」に関することに気づかせる授業とすることで教育学的な広がりを見ることができると考えた。

5. 今後の課題

5－1. 教職を志す上において「生涯スポーツ」の授業から学ぶことができたことに関して，被選択数が下位にある回答の取り扱いについて，学ぶことができなかったものと考えて今後の課題としたい。

5－2. 生涯スポーツの授業では，楽しさを見い出している回答が多く見られたが，果たしてそれだけでよいのかという考えと，そこから一歩進める必要も考えられた。また，本気になって楽しむためにはどのようにしていく必要があるのかを今後の課題としたい。

引用・参考文献

1）浅沼　茂 編集　他（2008）「活用型」学習をどう進めるか―表現力・思考力と知識活用能力をどう伸ばすか―新教育課程の学習プロセス No2. 教育開発研究所. pp.12-15.
2）伊藤　一雄　山本　芳孝　池上　徹 編著　他（2009）教職基礎論. サンライズ出版. pp.98-100.
3）教職課程研究会 編著（2009）教職必修　新

教職論―改訂版―．実教出版．pp.35-36.
4）宮崎　和夫　編著　他（2000）教職論―教員を志すすべてのひとへ―．ミネルヴァ書房．pp.18-24.
5）中嶋　郁雄（2009）教師に必要な6つの資質―学級担任に求められるリーダーシップがわかる―．学陽書房．pp.181-217.
6）米山　弘 編著　他（2001）教師論．玉川大学出版部．pp.128-129.
7）吉本　二郎 編者　西村　文男　他（1989）教師の資質・力量〈講座 教師の力量形成 第1巻〉．ぎょうせい．pp.272-277.